

超脱のプロティノスの概念

アラン・ブティ

超脱はプロティノスによって、ひとつの回帰として捉えられている。可感的な世界は、幻想と絡み合った世界である。行為へと向かう固有の本能によりこの世界に飛び込む魂は、そのことにより多様化し、本源的ではない複数の能力を獲得し、そのもっとも古い生命に属していないものに執着し、ますます自らを分散させる。救済はしたがって、可感的なものをめぐるこの慌しさから超脱することを前提とするのだが、超脱はある欲求であると同時に課題でもある。超脱は、ある別な欲求、ほかでもなく、回帰を生じさせる欲求が影響力を増すかぎりにおいてのみ可能なのである。超脱は、自己へと惹き付ける原理への愛着とひきかえにしてしか起こり得ない。

いかなる超脱も直接的な効果を持つことはない。超脱の指針は、自己の単純化に専念する一連の行為、魂の下降運動の様々な度合いに寄り沿う一連の行為に、この下降運動の方向を転換させつつ、適用される。この超脱がひとつの回帰の形をとるとしたら、踏破されるのは想起のあらゆる度合いであり、系列の頂点において自余のすべてを磁化するものへと引き戻っていく、さまざまな度合いなのだ。超脱はこうして、想起の連続的修練による自己の漸進的単純化という相貌を呈する。超脱と想起の、この密接な連関は、魂があらかじめそれ自身のうちで、現前の諸層と諸様態が多様化するのを見なければならなかったものでなければ、理解することができない。超脱するとは、自己を超脱するというよりも、自己の様々な偶像を超脱することなのであり、その「下降」のうちにある魂によって負われた多様性の根源を探究することにより、これらの自己の偶像の根源を再び跡付けねばならないのである。ところで、プロティノスにとって、この多様性は実際、行為を望み、そうすることで精神[Esprit]のうちにだけ留まるのをやめてしまう、魂の意志によって負われるものである。魂が精神[Esprit]のうちにのみ滞在しているときは、その自己への配慮は、共にあることのただなかでのみ行われ、魂は自己自身であるために自らを引き離しはしない。分離のこの経験、魂のこの分離主義は、その固有の力能[sa propre puissance]の予期と引き換えに、そこで自己感覚が自己であるための意志に場を譲ることになるような、ある強調された反省を必要とする。可感的な世界への執着は直ちに、下降によって被られることになる行為するための固有の能力[sa propre capacité d'agir]への執着であるわけではない。魂

にとっては、欲求された可感的世界は、その全体性においては存在しないからである。それぞれの魂は、他のすべての魂と同じ世界に属そうとすることなく、絶対的に支配者であろうと欲する。魂を可感的な世界へ執着させるのは、その排他的な単独性の望まれた徴しであって、魂のうちにこの執着を惹き起こすのは、この世界が世界であることそのものではないのだ。超脱が、厳密に言って、可感的な世界に対する超脱という表現では理解されないだろうというのは、まさにこのためである。超脱が行使されねばならないのはむしろ、世界のうちで行為する固有の力能という観念に対してであり、世界のうちでそれ自身に出会うことが出来ると信じる魂に対して、この観念が与える魅惑に対してなのである。これが、超脱がひとつの回帰の形態を、それ自身のうちで内省する単純で本源的な本性への回帰の形態をとることの、理由である。よって、超脱が非人格的な生成からなるとすること、自己自身を他の自己自身から区別するものの放棄からなるとすることは、出来ないだろう。確かに、一者への回帰は統合の相貌を装うが、この統合はかならずしも複数の単独性の消失を意味しない。超脱の絶頂は、言うなれば、自己の、他の者たちへの純粋な現前に存するだろうし、それは自己感覚がこの純粋な現前の感覚と同じものでしかないようにするためなのである。

超脱と固有意志

だが、このような一致は持続可能なものとは思われない。プロティノスは、それを経験というよりもひとつの回想としており、彼はこの経験の断続性あるいは困難を強調する。彼は、それ固有の慌しさと、排他的に自己であろうとする意志によって加重されたままの魂のなかで、この経験が遭遇する多くの抵抗を明示する。では、魂の究極的な存在様態を表す、全てのものへの自己のこの純粋な現前とは、魂がひとたび自己固有のあらゆる意志と、何であれ己のものにしようとするすべての欲求を脱したとき、一体どのようなものなのだろうか。

そこではある種の平静さが重要なのだと言うことで、それを記述するよう試みることも出来るかもしれない。そのとき、魂と一者の間にはもはやいかなる客観も挿しはさまれることはなく、魂は何事かを行ったり考えたりしようとするのを止める。しかしながら、このようにして獲得された平静さを、ある種の不活動として理解することはできない。プロティノスにとって、魂の一者への現前はむしろ、活動の至高の様態、いわばそれ自身に集中された活動の様態をなすからである。平静さの概念的核は、内的活動の展開に対する障害の不在に、また、思考対象の挿入の不在にあるが、この思考対象は複数性の要素を導入することで

現前をより純粋でなくしてしまうだろう。平静さは、それによって魂が原理[Principe]の行為に適合するところの行為と区別できない。原理と一つのものになることで、魂は原理の行為の中に、それ自身の固有の展開の根を見出す。プロティノスの逆説を際立たせつつ、魂はそれがもはや原理に外的ではないときにのみ、その原理と別なものではないときにのみ、それ自身であると言うこともできる。平静さが慌しさにその反対を見るのはこのようにしてである。それは、慌しさが魂をその原理から遠ざけ、魂に、行為の中心として自己の見せかけを選ばせ、活動に活動主義を置き換えるような魂の散逸を生じさせるからである。可感的な世界の特定のある領域における魂の慌しい存在は、魂を削減された活動に閉じ込めるのだが、魂はその対象を増やすことでこれを乗り越えることはできない。このような条件下において、魂は原理から厳密に分離されてしまうわけではないが、魂はそのとき、その所有する活動において支配者であることの価値を引き上げる。このことが自己固有の意志の観念に内容を与えるのである。超脱の平静さは、遍在していながらどこにもない一者の流れに新たに含まれるため、自分の行為を所有することを放棄し、自らを行為の原理にしない意志の中に、その根源を見出す。このときから、超脱には不偏化[neutralisation]の色合いが出る。それはまず、魂が一者に適合しながら、もはやそれ自身、特定の場所にあるというわけではなく、全的現前の、言い換えれば、普遍的帰属の、全き可能性を再発見するという意味においてである。超脱の効果を特徴づける不偏性[neutralité]はさらに、可感的な世界への魂の下降を正当化する自己自身への選好の消失を示す。超脱した魂とは、自己の配慮に自己への選好をもはや接木せず、自分の好きなように作り上げるそれ固有の世界を持つとはしない魂である。その魂は、自身と自余すべてのものの間に障壁を設けず、それ固有の働きの価値を高めたりもしないことで、それが普遍性において[en universalité]獲得するものを所有において[en propriété]失う。この点で、不偏性[la neutralité]は、全体のただなかでもはや諸差異を設けない意志の意味を再発見すると言えるが、それはこの全体に連続性を、行為の連続性を復元するためである。それゆえ、超脱とはある喪失ではない。魂は実際、それ固有の意志の行使を諦めるという事実によって、目減りするわけではない。まったく反対に、魂はこの固有意志の行使によって失ったもの、固有意志の構成に先立つもっとも本源的な本性の意味を再発見するのである。よって、自己であろうとする意志[la volonté d'être soi]と、自己のものでであろうとする意志[la volonté d'être à soi]を区別しなければならない。この意志の第一の形態は、一者と全体に対する分離

を前提しない。より正確に言えば、この分離は、一者の忘却に伴う自己の忘却を表しているのである。自己のものであろうとする意志とは、その自己充足性の肯定をもっとも少ししか含んでいない意志だろう。それはしかしながら、全ての存在意義を失ってしまっているわけではない。

というのは、固有意志は魂の、諸可能事全体に対する減少であるが、それは一見したところ、可能な行為に向かつて投企する魂の集中のように見える。このことが、魂が感じる、自己自身のものであろうという欲求のなかで、魂が厳密に言えば自己を目指さないようにさせるのだ。自己愛に含まれている全ての策略は実際、それを感じる者の目には意志の絶頂と思われるものが、この自己愛に伴う必然性であるという点にある。自己愛に内属するこの二面性は、逆転の潜在性を含んでいる。魂が予めそれ自身に帰属させる世界を支配しようと志すのに対して、他の魂とともに可感的な世界に気を配るよう密かに魂を向かわせるのは、自然の法則なのである。魂がそれ自身のものとして志すものは、ただ幻想としてしか固有のものではないのだが、それは魂が可感的なものの主導権をとりつつ、それをめぐって己の課題を達成することを許す。こうして、必然的なものは意志的なものに、その隠れた動力として含まれている。だがかくして、それ自身のものであろうという、望まれていた事柄は、結局は獲得されない。プロティノスの思想には、個別的な意志とその結果の繋がりに影響を及ぼす、ある種の運命的なアイロニーがある。自己のものであること[l'être à soi]とは、一者の忘却中でなされる魂の決定に由来する、自己であること[l'être soi]に対する寄生的様態なのである。この決定が、魂に気づかれはしないとしてもその意志の最深部に書き込まれた宇宙的[cosmique]な必然性に対応するということも、同様に真実である。自己愛は、このような条件のもとで、宇宙的に見て有用性をもったナルシズムを構成するだろう。というのは、可感的な世界における自己の幻影の魅惑は、魂に自分の好きなように行動させて、魂自身の固有の目当てよりも高い目標に役立たせるだろうからである。

可感的な世界のただなかにおける行為はこうして、同時に実効的でもあれば幻想的でもある。魂の行為は、魂がそれに割り当てられた世界の領域をまさに形成し、それによってこの可感的な世界の美しさ貢献するかぎりにおいて、実効的である。この論点に関してプロティノスはいかなる緩和もしない。彼は、彼らが可感的な世界に対してあらゆる美しさを否定してしまうために、他のものに並んで、グノーシス主義者たちと闘うのである。だが、魂の行為は、

魂がそこで究極的には自分から発するわけではないものの主導権を自分に帰すという、まさにそのことのために、幻想的である。行動はこの場合に、その主体の外向によって弱められ、この主体は、それが世界のただなかで取り組むものに、固有意志を満足させるために必要なものを見出すことができない。魂は、自然の法がそれに達成させようとすることを達成するが、他方で魂は、可感的な世界の中で手に入れようと望んだ私的な世界において、自己のものであろうとする意志の対応物を発見しない。この意志が実際に直接かなえられることはないのだ。支配の目論見は、一者の恒常的な展開に内属する意志と行動の本源とは本質的に両立不可能だからだ。固有意志とは、一人称で行動するという単なる意志ではない。固有意志はこの行動を、諸行為の擬似原理として仕立て上げつつ、この行動を一種の偶像とし、それを絶対化して分離する。魂は自分の排他的行動の予期された表象に自らの姿を映して見るが、この排他性の欲求が、魂に原理を忘却させる。魂はしかし、実際にはこの原理の名において行動するだろう。

固有意志がそこで企図を行おうとする世界は、よって、厳密に言えば可感的な世界ではない。確かに、魂はそこで働くが、それは、魂自身が与り知らないのにその意志そのものの中に組み込まれている運命に従ってのことである。このことが、魂が活動の枠を予め制限し、固有の能力[pouvoir]の感覚を自らに与えながら、この「自分について」にますます執着しつつ、自らを特殊化することで企図を行おうとし、自らを分離しつつ個的なものとなるようにする。プロティノスによれば、理性[Noûs]から自分を引き離しつつ、魂は、それ自身によって作られたものとなりうるものを探求するため、存在する全てのものから自分を引き離す。そして、魂はそれが知らないものを経験したいと欲し、実践的な新しさの魅力によって磁化される。ここでは行うことがはじめに来るので、魂は理性との分離の所作を事後的にのみ認める。だが、この行うことの優先性こそまさに、魂に対して付随的な諸力能[puissances]の導入を惹き起こすものなのだ。魂がその実践的能力[pouvoir]、その作用[operari]について得る経験は、魂の純粋に知的な力能[puissance]に作用的[opératives]な力能を加えることで、その存在様態に影響する。魂はいわばその固有の主導性によって増殖させられ、その固有の多様化が存在の平面の制限に伴う。自己のものであろうとする意志は、現実には、その遂行の終わりに、同時に単純さと普遍性をより失った自己しか見出さない。それ自身にとって全てであらうと欲して、自己は世界の一部に自らを閉じ込めてしまうのだが、その一部分とは自己に割り当てられていたものに他な

らない。だから、自己自身に騙されるのはある意味で自己愛である。おそらく、自己愛のもっとも明らかな企図は、それが欲求するもの——世界に対する実践的な帝国であり固有の行動の絶対的開始——をそのように欲求することによって、魂が求めていたであろうものとは別のものを獲得するような仕方、摂理によって用いられる。これは、その全体性において捉えられた可感的な世界の飾り立てに対する、さらなる一つの貢献である。

この点において、超脱は、魂にとって再び見出された明晰さの一つの形をなすだろうし、排他的な行いの無条件的選択において失われたものの価値を評価するだろう。だがそのためには、魂のなかでこの選択に先立つものを再想起しなければならない。それは、この選択によって隠されはしても失われてはいない、理性[Noûs]への帰属である。魂は、この選択から来る内的な多様性を身につけつつ、同時に複数の平面で動く。魂は可感的な世界のそれ固有の領域に完全に執着しているわけではなく、その傾向性にも関わらず、その固有の領域に全面的に熱中してしまうことは、魂にとって不可能である。行動とは思考内容の一種の外在化であるため、分離主義はひとつの語義矛盾になるだろうからである。慌しくしている魂は、魂のすべてではない。それは魂の中においてその意志の基調を支配するものであるが、そのとき知性的なものは背景に押しやられつつ、確かに恒常的ではあるが魂によって気づかれていない活動を断続的には許されている。超脱が初め、知性のある想起、魂の根のようなものである理性への帰属の再生の形象をとるかもしれないのは、このためである。だからそれは、普遍的なものへの再統合、あるいはむしろ、魂の中において、普遍的なものの中にとどまったものが強調されることである。超脱とは、様々な個性の共存、そこでは誰も固有領域の支配を求めないような、はっきりと共有された活動へと、意志が方向づけられなおされることである。それは、他のすべてのものの立場になることのできる魂の力能の再把握である。なぜなら、その活動——そのときそれは純粋に知性的である——は、排他的行使という意味でその魂に固有のものではないからである。自己自身の個性は、その固有の存在[existence]を行使しつつ自己証明するために、全てのものから自分を差し引く必要がない。自己であることは、自己のものであろうとする意志をもたず、理性の共有された活動の中に自分を基礎づけつつ、強められる。分離主義的な自己愛は、既に見たように、自分の行為への愛でもなければ、その個性の純粋な享受でもない。自己愛は理性のうちでのみ可能であり、そこで自己は他のものたちから分離されはしないからである。

魂に重みを課し、それを可感的な世界へと導く性向は、理性から離れて行動しようという選択によって絶対的なものとされた差異を享受するひとつの性向である。まさにそのことにより、この差異は魂の幻想的な享受の対象であり、自己によって目指される絶対的な差異は、意図的であり続けるよう定められていながら決して実効的になることがない。自己であること[l'êtré soi]に接木される、自己のものであること[l'êtré à soi]は、自己のひとつの偶像でしかなく、超脱はそれをそのようなものとして認めるように強いる。よって、私的な世界という形をとる、この世界における自己の企図を、停止することが重要である。接続を断つことではなく、自省することが必要だと言うこともできるだろう。超脱した自己は世界のうちにとどまるが、その様々な威信に騙されるのをやめる。自己は、統一を獲得するように、理性の中にあるその根と自らの様々な能力とを再び結ぶ。超脱は、固有意志が引き延ばすものを、単純なものと稠密なものへと戻し、このとき魂の根と、魂の展開の原理には、統一がある。自己を超脱するとは、自己から離れることでも世界から離れることでもなく、自己が世界をより真実な姿で、一致して働く諸存在の共同体として再発見するように、自己に世界の幻影の重しを課す固有意志の帝国から離れることなのである。

平静さへ

しかしながら、それは超脱の始まりに過ぎない。知性的なものへの回帰は、実際には、完全に所有から脱することでも、全面的に働きをやめることも意味しない。だが、超脱がもたらす平静さはその課題に適っている。プロティノスは知性的な共同体で満足しなかった。それは彼にとって最高度の統一ではないのだ。なぜなら、全体性として理解された知性の中にすべての存在が含まれているとしても、思考の存在の同一性はその二重性の維持と相容れないわけではないからである。精神のただなかにおけるそれぞれの個別の精神[Chaque esprit au sein de l'Esprit total]は、それが思考するものとまだ区別されざるをえない。それが思考する対象が精神[Esprit]のうちにあったとしてもである。精神のうちにある諸精神の共同体[La communauté des esprits dans l'Esprit]は確かに、自己のものであろうとする意志を自己の外に保った。だが、この共同体はまだ自己を全体へと完全に内在化してはいない。それは、まだ客観的な次元を持っているから、不完全な共同体なのだ。精神[Esprit]は自らを形成するためにはそれ自身のうちで諸形態を差別しなければならなかった。それぞれの形態が個別の精神[un esprit]であったり、あるいは、個別の精神[un esprit]でもあったりするとしても、精神[Esprit]のうちに

は個別のそれぞれの精神[chaque esprit]の客観的な姿が
つねに残るだろう。どの個別の精神[esprit]も自己のも
のであろうとは欲しないとしても、自己であることの感覚は
やはり、形態を思考するというそれにとつての事実
に照らして評価しなければならないのだ。そして、その
限りにおいて、全ての個別の精神[esprit]はまだ、一に
おける二である。超脱がそこで終わらないのはそのため
なのだ。それは依然として、統一であることのない、統一
の痕跡である。だが、超脱が個別の精神[esprit]のそとへ
のいかなる跳躍によって完成されるのかを知る課題が
残っている。実際、思考するものと思われ
るものの、精神に内在的な二重性を乗り越えるとは、自
己性を他動詞的行為——これが形態の思考である——に
即して評価するのを止めて、すべてのものに対する唯一
の現前と区別しないことである。超脱の究極の瞬間——
プロティノスが「あきらめ」と呼ぶものの究極の瞬間——
は、客観的思考の自動詞的思考への転換から発するだ
ろう。これが、外在化なき行為、言い換えれば絶対的
行為であるところの、「超思考」["surpensée"]である。
それは、エネアス 8 (chap. 11, 1. 23)の言葉を使え
ば、allos tropos tou idein、つまり、見ることの別な仕
方、個別の精神[esprit]が一者の統一性と一者における
統一性を記述しようとするときに用いざるを得ない逆説
的な言葉を用いば、見る者の現前の外にあるものは何も
見ないという事実を表現する言い回しである。それは確
定的な対象にもはや関係せず、一者がそれ自身を見るこ
とのうちに溶け込むような仕方で見ることである。この
意味で、超脱の先に論じた形において求められたもの——
魂の精神への移行——、すなわち現前に集中するために
作業を諦める或る形は、いまやその十全性を見出すと
言い得るだろう。少なくとも個別の精神の領域と諸能力
にとどまるのなら確かに逆説的に思われる結果とは、
見ることが一者の無限性のうちへ拡散することである。

だが、これは本当に拡散なのだろうか？ 見ること
[vision]から全ての確定的対象を奪うことは、本当に
見ることから強度を差し引くことになるのだろうか？
見ることの十全な強度に対する障害になるのは、むしろ
その「通常の」対象の確定性ではないだろうか？ 見る
ことがそこに沈むように思われる一者は、精神によつて、
形態が見られるようには見られないことができない。
この状況において、超脱の終わり、旅の終着は、自己
の意図的傾向のある種の転換を必要とする。全てがそ
こから来るものを見るためには、もはやそれを客観化
しようと欲する必要はない。究極的な見ること le voir
ultime はよって、超脱によって得られる十全性の度
合いに依存する。いくつかの言葉がその道を示

している。まずはエクスタシス[l'ekstasis](エネアス9 11, 23-25)であり、これはその定式化の単なる事実によってすでに、超脱の終わりにプロティノスの正当化を与える。それは「諦め」(aphairesis)の様々な度合いによって標づけられた道の殆ど終りである。自らに立ち返った個別の精神はまだ、その方向を変えさせるものに近づくため、固有の知的領域を出なければならぬ。エクスタシスにおいては、自己から離れること以上に、思考するものと思われされるものの二重性から、精神による一者の分割から生じた世界から、離れることが重要である。第一の超脱は可感的な世界の中で働くのを止めることを前提し、他方、第二の超脱は、精神が構成した媒介なしに、その行為において原理を相手にするため、我々に、知性的なものも含めて、世界全体を諦めさせる。エクスタシスは、ひとが何事にも執着せず、何も選好しないようにする、眼差しの脱客観化である。そこから出発して全ては現前するのであり、その外では何も現前しない。ひとが外在化をするかぎり、ひとは、精神のなかでまでも、自分が見るものを見ようと欲する。様々な個別精神[esprit]のあいだのそれぞれの個別精神が問題でないとしても、固有意志そのものは、一者に対する精神[Esprit]の行為にとどまりうる。よって、精神の固有の発生とは逆に行かなければならないのであり、それはエクスタシスを正確化しに来る第二の言葉が示すことなのだ。この第二の言葉がアプロシス[l'haplôsis]、自己の単純化である。

精神という条件から離れることと、自らを単純にする事は、こう言うことが出来るなら、ただ一つの事柄である。というのは、超脱が本源的な本性を再発見させるとしたら、超脱は、一者の純粋な行為へと自己が内省することを、自己にとって言えばおそらく、その差異化する視覚[vision différenciatrice]を取り除くことになる行為へと思考が自省することを、要求する。対象のこの不偏化[neutralisation]は、ある受容的な能力を解放するであろうが、この受容的な能力はまさに先ほど言及したばかりの、見ることの別な様態であろう。プロティノスは、9, 11, 23-25 においてますます、それが理解されうるものかは分からないが、超脱のうちで委ね寛いでいるものを強調する。本源的な本性を再び見出すことは、魂を可感的な世界へと傾かせるその分離主義の反対物である。この分離主義を乗り越え——あるいは分離主義に先立つ——精神の自己差異化は、それ自身で究極的なものではない。なぜなら、無差別的なものの本性上の統一と関わるが必要であるときに、精神の中には多様性の意志的統一が存続しているからである。

絶対的に超脱した自己は一者へと身をゆだね、それが一者を見ようと求めないとき、一者を見る。だから、一者に関する最後の言葉は、不偏的なもの[le neutre]ではない。「見ることの別な様態」が確かに諸差異の消去を前提するとすれば、それは連続的な強度における行為への接近を調整するためであり、この場合において、無差別的なものは差別されたものよりも豊かであり、その逆ではない。自己を委ねることとは、自らを沈めてしまうことではなく、むしろ自己自身によって見ようと欲すること、目指すことでありつづけるような見ることをやめることである。一者は、自己がそのうちに自分を基礎づけつつ非人格的なものではないのと同様に中性的なものではない。一者に溶け込むことで、あるいは少なくとも一者のうちにすすんで捉えられることで、また、おのれを見るのとは別な仕方で見るとを欲するのを止めることで、ひとはより少なく自己であるわけではない。プロティノスは自己のきわめて繊細な先端におけるこの同意された受動性を、複数の術語によって言い換えようと努力するが、そこでは、自己のうちの瞑想は、自己と一者の無区別によって完成する。

もはや一者と一つのものに他ならなくなることで、人は自己と一つになる。個性性はそれ自体では固有の活動もこの活動の支配も意味しない。個性性は自分の固有の原理であることを要求しない。原理に対する疎隔化は自己の忘却を増大させるだけであり、分離の意志はその自己性を脆くする。プロティノスは、一者のうちに自己の個性性そのものの根源を見て、一者との一致(epharmogé)の意志のうちに、一者への再帰の最終段階を記述しようとする。これは、一者と自己の間で自己によって蓄積された媒介が次々に除かれたときの、根源の想起の高まった頂点である。だが、原理との統一化の第一の古典的な論文であるエネアス9は、この統一の完成をよりどころにしない。すべては恰も、プロティノスにとって、同時に根源でもあれば回帰でもある一致のこの状態が、魂の現在の状態において、妨げられ垣間見られたものにとどまるかようになっており、そのとき、一者の外へ出てしまうことが、精神の自己肯定の本源的な所作を犠牲にして、その諸権利を再獲得する。超脱はつねに可能であるが、それはその行為によって惹き起される一者の再想起と別なものではないからである。しかし、それは決定的な休息の状態、別な試練を経験しないであろうような、魂による不可逆的な征服なのではない。一者との一致は逆説的にも、その個別的存在にとって構成的であると同時に、魂にとって、忘却と再征服と再把持の対象なのだ。もし超脱がその最高度において一者と同じただ一つの行為のみするよう促す、働きの停止であるなら、この

働きの停止は一者の外部における諸個別性の必然的生産の法則を考慮に入れなければならない。超脱は、別の角度から捉えられると、対象なき瞑想であるが、他方、瞑想の対象、即ち形態はそれ自身、この法則から発するのである。それゆえ、諸原理の本性的な生産性の中で、全てが超脱に対して陰謀を企てると考える誘惑があるかもしれない。

ところが、行くことと戻ることの不可分性こそプロティノスの形而上学の特徴なのである。このことが、超脱が一者への回帰という外観をとるとしたら、超脱はある意味で直ちに達成されながら見失われるようにさせる。我々は一者のうちにあることをやめる事などないし、我々は一者から出てしまったわけではない。我々の眼差しだけがそこから逸らされてしまったのだ。自己を超脱することは、ある意味で、我々の本源的な帰属へと向きをかえることだろう。だがこれは、ひとが可感的なものと知性的なものという二つの世界を離れることを前提する。そのようなことが、エネアス9 (11, 1. 51)の有名な謎めいた結論の定式の意味であると思われる。「ただそれへ向けてのみ、ひたすら逃れよ」(phugè monou pros monon)。原理の孤独は、その絶対的な現前に、全面的な内向に、原理的な独立に一致する。超脱は我々にこれほど高い孤独を再発見させなければならないのだが、そこでは全てが自己でしかなく、自己を目指してしかいない。孤独とは、存在の孤独というより、実際には、行為の孤独なのである。

一者は自己以外に何も必要がないし、何も目指さないし、何も求めないし、何も欲しない。私が一者と一致しようと求めるとすれば、そのとき私は自分の意志のうちにある他動詞的なものの全てを自分から奪う。それ自身を欲するものの以外には何も欲することなく、自己は最高の度合いにおいて固有意志を放棄し、自己肯定を、即ちその最大の剥奪の終点において、その固有の存在を、放棄するだろう。しかし、これが、自己の個別性の犠牲を払って行われることはないだろう。けだし、自己の孤独は存在が尽くすことなく個別性のもっとも大きな強化である。私はよって、一者の中で、私自身に戻されているのであり、私は直接的に私自身であり、或る意味で私はつねにそのような者なのである。私は失ったものに戻っていくのではなく、見失ってしまったものに戻っていくのである。私は孤独は私にとって、例外をなすことにではなく、一者がそれであるところの「全てのものの力能」からもはや自分を引き離さないことに存するのだろう。そうして、実際、この経験の不安定性にも関わらず、もはや私にとって外的なものは何もなく、私は、固有意志を放棄することでみずからを絶対的にする。

私は、もはや他人の他人であることで私自身であるのではなく、区別された存在を欲するのを止めることで、この同一性自体から離れたのだ。私は、私からは、媒介しか奪わないのであり、そのとき私の孤独と同じものである直接的なものは、よりいっそう強められる。差異なき存在は個別性なき存在ではない。あるいはむしろ、この差異を越えた超存在は、そのうちにとどまり続ける諸個別性の本源的行為なのであり、この諸個別性は互いに差異化することでこの超存在から離れていく。「あきらめ」が為し遂げられたとき、可感的な世界における行為と、知性的世界における存在の彼方で、世界全体の純粋な外部での現前があるだろう。為すことの欲求と存在することの欲求の彼方で、一致することへの或る欲求が、無関心な欲求ではなく、無関心の欲求が、あるであろう。

超脱はしたがって、固有の個別性の不偏的なもののなかにおける溶解へ至ることはない。確かに、休息が重要なのだが(stasis, エネアス9, 11, 1. 24)、この休息は憂慮の終りなのである。論じられたように、固有意志を脱せねばならないが、それは自己自身になるのを見とどけるために他ならず、この自己は一者のなかで境界を持たない。もっとも強い条件は確かに、何らかの客観的なものに関して企図を行おうとすることをやめる意志の転換にあると思われる。そしてすべての個別的な欲求は、その根源と目標を区別しえないような、一者の欲求である。一者が私のうちで望むもの、それが私の望むものだ。この意志から、私はいかなる結果も、いかなる見返りも期待しない。この意志は自己を直接的に享受する。超脱は、根本的な脱所有という代償を払ってのみ、旅の終着に達する。それはひとが、その存在と意志の排他性に、もはや価値を付与しないときである。もはや何かを専有することを要求せず、自己自身であることさえも要求することなく、魂はさらに高い至福の孤独に達する——平静さに。

(翻訳・高橋 若木(東京大学大学院))